

きっかけは私の就職活動だった。電力会社のインターンに参加し、プログラムの一環で美浜原子力発電所を見学した。帰り道、祖父の家に寄り、インターンの話をした。すると、美浜原子力発電所に使われている塗料は祖父の会社の商品であったと話し始めた。その時は特に注意することもなく聞いていたが、その後よくよく考えるとこれは面白いのではないかと思い始めた。というのも祖父は幼少期を原爆投下後の広島で過ごしている。直接被爆してはいないものの、焼け野原の広島を自分の目で見て、原子力の恐ろしさはその身に染みて感じたと言う。しかし、就職した塗料会社は、昭和の原発開発ラッシュ時に、関西電力と提携し、複数の原発開発に携わるようになった。核が及ぼす最悪の被害をその目で見てきた祖父は原子力発電所ができると思ったときどのように感じたのだろうか、と思ったのだ。そして自分の会社がその開発に携わると聞いたときどのように感じたのだろうか。さらに 2011 年には福島第一原子力発電所事故が起きている。核兵器、原子力発電所の開発、そしてその事故という核の三つの顔を知る祖父は、何を思うのだろうか。

2011 年の福島第一原発事故以来、原発廃止の運動が進んでいる。当事国の日本に関してはまた 2009 年にはプラハ演説にてアメリカ・オバマ大統領が「核なき世界」をうたっている。「原子力発電所」「核兵器」この二つはこれから先、どんどん減っていくだろう。核兵器の数は 1986 年の 64099 発を境に年々縮小傾向にあり、2013 年には 10144 発になっている。¹もちろん「被爆者」と「原発開発者」も然りである。

この二つを知っている祖父の人生は非常に稀有な存在であり、それを文章に起こすことには大きな価値があるだろう。このルポが、後世に何かしらの影響を与えることを願う。

¹ 朝日新聞 DIGITAL <http://www.asahi.com/special/nuclear_peace/change/> (2016 年 1 月 13 日アクセス)